1 Ba- 8

長岡女子師範学校卒業生にみる家庭生活と子育ての両立，キャリア形成

○草野篤子（信州大），高橋桂子（新潟大）

《目的》　就労をめぐる法的環境は順次整備されつつあるが，未だに母親が雇用者として働き続けることは難しい。しかし，周辺環境が未整備だった時代にも子を育てながら仕事を継続してきた女性たちは数多い。アンケート調査やヒアリング調査を通して知恵やヒントを学ぶ。

《方法》　昭和 19～21 年に長岡女子師範学校を卒業した女性 425 名に職業と家庭生活の両立に関するアンケート調査を実施，あわせてヒアリング調査協力を依頼。協力回答の得られた方に順次ヒアリング調査を実施。居住地別にみた回答者分布は新潟市内5人，長岡市内3人，東京都 4 人，千葉県 2 人である。調査時期は 2000 年 5 月上旬～11 月上旬である。

《結果》　主な事例は下記の通りである。

○職業と子育ての両立：　教員年数 42 年。東京。義姉と甥の生活を引き受け，一人娘の子守りをお願いする。教員になる・続けるという明確かつ強い意思・信念／　教員年数 35 年。長岡。住み込みの子守り（現在も同居）を雇い，2 人の子を育ててきた事例。教員後も通信教育で研鑽を積む／　教員年数 37 年。新潟。配偶者の関与が大きくかつ，家庭生活と仕事生活はともに影響しあう存在であることを体験された事例。「子と夫に心から感謝している」

○キャリア形成：　教員年数 40 年。新潟。3 度の単身赴任，教頭 1・校長 2 校。「こうしなければならないというマニュアルはない」／　教員年数 5 年。東京。勤務時間後に夜間大学で勉強。